都林泉名勝圖會　三

754
.M41
V4

都林泉名勝圖會巻之二

目録

清水寺　朝鮮石
離島石　振袖手水鉢
延命院
歌中山　要石
蓮華王院　千鳥井
善源院　什宝
月輪
虫干圖
萬壽寺
虎関禅師趾
正徹墓

同西門圖
田村丸田瓶
恵書院　老月名所
若松池
燕子花遊宴圖
智積院
東福寺
三聖寺
霊源院
正統院　兆殿司古跡
通天橋　観紅楓圖

成就院　湯屋谷　烏帽子岩
宝生院　霊山圖　阿弥堂
浮瀬　春狩山遠系
南蔵院
阿弥陀峰
法住寺殿古蹟
耳塚　観和蘭人
什寶
鳥燈爐
海蔵院
栗棘庵
即宗院

周工　樋口源

自然居士墓
同記
南明院
兆殿司墓
清少納言古墳
墨染里　有馬稲荷
豊太閤霸跡
靈雲院
正覺院
俊成卿墓
南昌院
舎人親王陵
梅渓　桃山　新善光寺
龍徳庵
遺愛石
荘厳院　双峨石　獅子岩
同女墓
清原深養父塚
稲荷初午圖
伏見山
慶雲庵

都林泉名勝圖會巻之三目録　終

清水成就院

相阿弥作
小堀遠州補作

其一

祇樹籬低界竹
囲院庭幽豁俯
渓限誰知雲嶂
藤蘿翠還映
皇城霞綺開

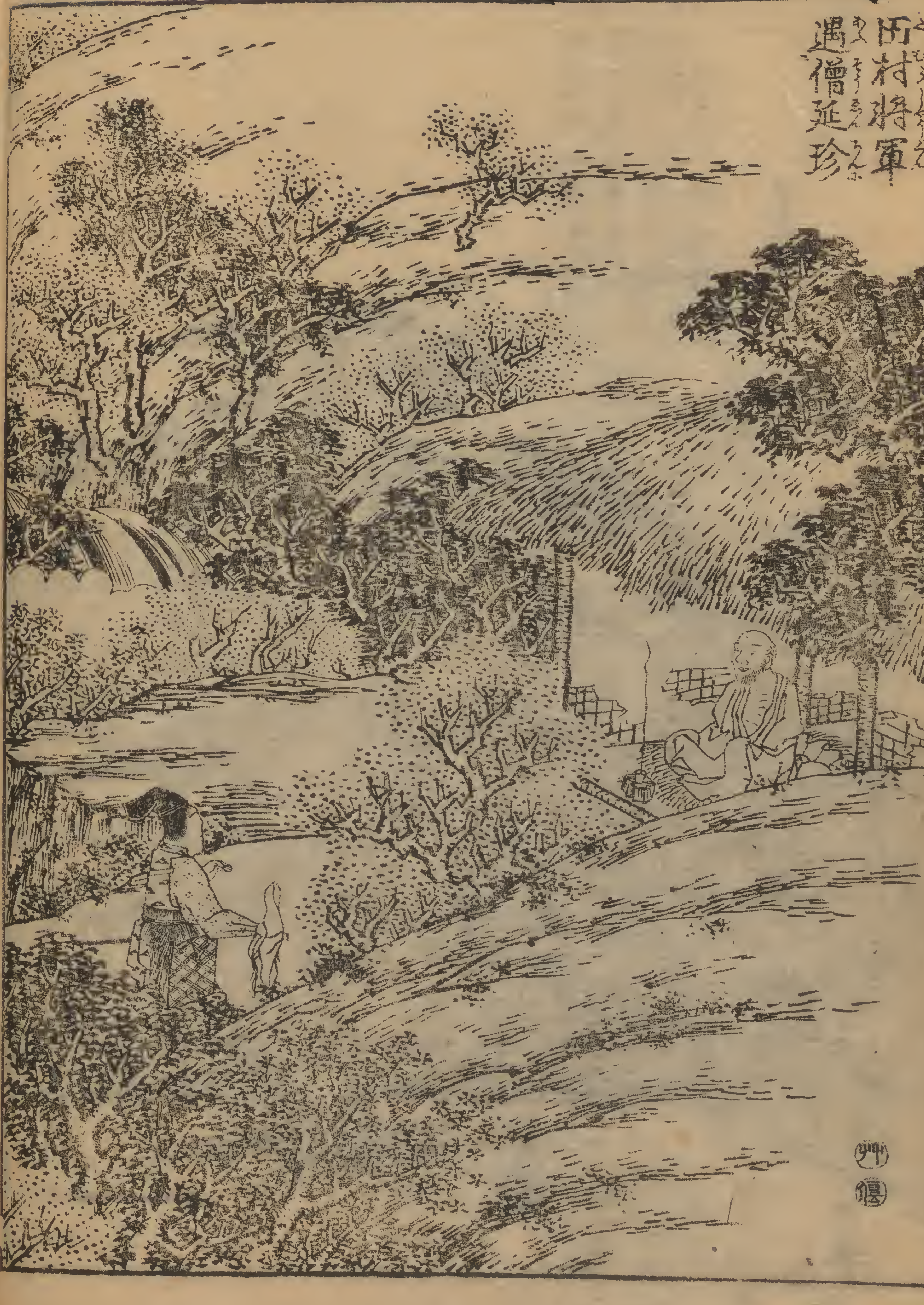
百々肇

成就院

其二

施園何必布黄金
泉石弟同長者心
披對于今如出世
一庭樹是祇林

新羅彌


田村將軍
遇僧延珍

偶尋劉阮入
天台流水飛花
隔世埃孤杖行
迷采藥路犬鷄
聲近白雲堆
艸廬

音羽山清水寺は洛東の佳境也 嵯峨天皇の宸筆東寶記に國家鎮護の為官府より賜ふ印一面とおしく長財とも色しとある額あり侍従大納言行成の筆と著聞集に見へたり縁起は歴代編年集成に著し堀川院の御時御なやみ一七日宿したまふ事元亨釈書にあり大極那坂上大宿禰田村麿鈴鹿山の鬼神退治の事は当山の縁起に見えたる外の實録聞えず悪七兵衛景清主馬盛久の霊験と平家物語の長門本に詳なり地主の桜はむかしより名高く古詠多し音羽瀧は四時増減なく清冽にして所謂五名水の其一也と拾芥抄にあり清水寺に十景あり

古崖懸泉　春巌開花　音羽畳翠　霊鷲疎鐘　洛陽萬戸
鴨河一帯　東郊烟雨　西門遠眺　岩嶺晴雪　亀阜暮靄　正通

新撰朗詠　清水寺上方迎春
烟霞隔路三千界　花柳藏城十二衢

自然齋発句集　宗祇
名にかゝり花ぞさかりを深山かな

黙雲稿　清水寺天隠
第五橋東山路斜　飛泉吹雪梵王家　太平有象遊人喜　乱后初看地主花

従中納言為家

秋あさそりきさゝ水たこのかく待しみ風やあくらうにふかき
士の葉ほろくと瀧のうきはまにちつれ遠方をみちかなとつほ○
のまへにさゝきわくちるもしきたるか

おとは身のつまのかたをのとうなたとの嵐にちる木葉なる　従中納言

玉葉
法成寺入道摂政清水寺にこもり侍りけるに侍りけるに
瀧の音もいかで守らん都には物あはれなる須磨も有るか　花山院

拾玉
むかしより執ふかく人とのはかな清水寺の瀧乃志ら糸　慈鎮

夫木
とうこするかさゝめ小妹かみえされつゝ此河にいへ清水乃瀧　俊恵

境内成就院の林泉は名庭にして相阿弥の作後に小堀遠州修補ある所也擂袖の手水鉢鶏岩名石烏帽子石は須磨浦より来り移次飛石五つの名石は加藤清正朝鮮より取帰つてよく此寺に寄附次湯屋溪は秀吉公ちかく遊ひまつ附浴室を建られし古跡也今は中門の形遺まり護摩堂は東福門院の御寄附なりし庭造る洛東の妙境にしく遠近に見来を連ねたり又同境宝生院の客殿は往昔

後奈良院の寝殿なおしくありに移次坊中延命院ハ前に豊國山清閑寺あり嶺なり座中の壮観とし勇吉院ハ林泉より遠望すれハ八幡山嵜淀川の長流鮮みしく奇観之瀧の下南蔵院ハ酒旗に名高く劉伯倫の徒ありつとひく嘉祥の瀧飲の興あり僅次俗の楼を浮瀬といふ

歌中山清閑寺の林泉ハ眞妙ふしく座中に要石あり 或云六條院御陵 小堂の趾之といふ 紫地僧都

渡月橋といふありて獅子口に似たる也とて此名あり 高倉院の御陵あれハ御愛樹の丹楓多くして蕭枝の眺め錦繍を晒すがごとし又山谷に松茸生して洛陽の貴賤むれ来って遊莚を催次風流の勝色あり

茶唐

清閑寺百首家の花といふ題に

山風のさそふも去てはなのくれ枝来るらくちる桜かな　敬阿

東へまかりて侍りしに清閑寺にまうでくべきよし申侍りしハ道我僧都にあひて

秋ハかへりまうでくへきよし申侍りしハ僧都

兼好集

かへりこむ命をしらめやめぐりあはん秋ともせめて契りをかたし　道我

ゆくもとまるもいのちもしらぬ別れぞ旅ともに契りおきつるをまたなり　兼好

弘松池 むかし五条大納言邦綱卿山荘弘松亭あり又桜泉に大池あり故に此名あり旧跡ハ渋谷路の南阿弥陀か峯の西北の麓にあり今田圃となる

宗長日記云

大永六年十月十日下京に出て明日大津まてといふ 中略 弘松の池清水谷しみ谷にさしかかり三井寺の人あまたして三井寺勧蔵坊山科花山あたりの人々とそ人おほく見る 弘松の池勧修寺まで誘ひて其の下ぬり京よりの人を送りし神なしの森ともいへる関屋の軒端をゆ

阿弥陀峯

今豊國山といふハ慶長三年豊臣秀吉公を阿弥陀か峯に葬送次世に公時の列式あり八月十八日に薨御ありて翌二月十八日此嶺に葬り導師ハ高野山興山上人其外諸宗の僧徒出る勅使ハ菊亭右大臣晴秀公廣幡大納言長重卿御供の諸侯悉同勢凡而二万餘人云

枕草紙云

峯ハ阿弥陀の嶺

顕昭拾遺抄云

慶長年中豊國社造営の後阿弥陀か峯と云条の東東田山に接次

鳥辺山ハかのところ峯也そのふもとを鳥辺野といふ無常所之　公任

家集

今よりハわかところ葬の月影を千世の坂中そのまへとらふ　懐人あるにたて

塚中集

道あるくさうりおほろ身なれともかのところ葬にハいらんとそ思ふ

羅山詩集

題豊國神廟壁

零落東山古廟蒼苔蔓草上頽墻

英靈飛散無巫祝秋月春風作主張　文山

芙蓉楽集　豊國社の花は枝につけて赤木上人のもとへ

一枝も手折たる花をまくにおりて見んかもかの庭にあるやせ　光廣

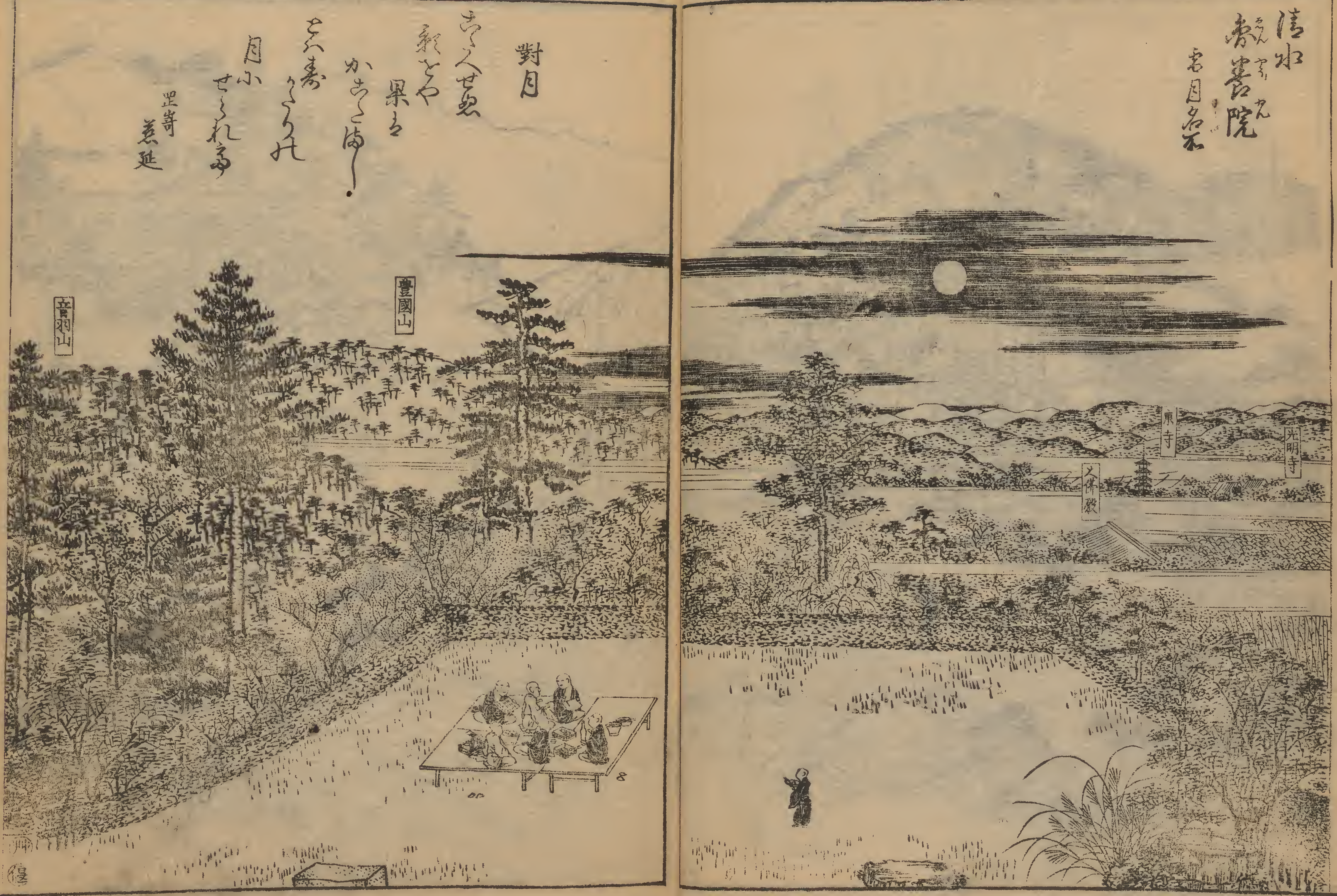
清水寶生院
霊山
幽地客尋稀
芳花空掩扉
春風吹去処
暮作白雲飛
梅華仙

Stream from water basin

清水 延命院

緩歩哦詩訪寳坊
百花歴乱送斜陽
羽峯吐月飛泉濺
鳥野鎖霞遠樹蒼
信求圓通感懐起
迷窺色界似相藏
乃公能為憐吾輩
還使塵躬想浄疆

龍州盧女孫
熊谷氏貞蘭



清水
書院
對月
慈延
音羽山
豊國山
東寺
光明寺
大佛殿

Chodzubachi (water basin) awning
Sleeve-fence

Lines of roof
Support of porch

歌中山
清閑寺
秋興
秋の月影
慈延

蓮華王院の堂前の林泉ハ燕子花咲みだれて初夏の眺幽艶なりむかし
此堂の前ハ小き醴泉あるよし元亨釈書百錬抄にも見へたり今の林泉
水なりとぞ

著聞集云

永万元年六月八日蓮華王院の御仏を後戸の棚の角より北へ
第四の間に置き奉りたりけるやんごとなき老僧出来て云此仏水
をは何の料に据ぞ此水ハ細しといへとも八功徳水并落利益含識方
便水なりあまねくすゝむるぞよく〳〵精進して汲べきなりと云もつて夏
覚たる去程に件の後戸の石切の下に現に水ありたり貴賤汲たれ
ども更につきずなりてまゐらせけるにもあまりなりける不思議なる事也

当時その水今は何のところも見えざるは貴業なし

法住寺古蹟

今の養源院智積院の地なりといふ 初め太政大臣藤原為光公の建立也 丈六金色釈迦仏を安置す 其後後白河院ここに仙院を建て法住寺御所といふ名泉あり桐井といふ今さだかならず

長秋詠藻 嘉応二年法住寺殿の殿上の歌合に関路落葉といふ心を

しぐれつゝ木葉ふりしくなりたるもみぢをとさへたる志らかはの関　俊成

平家物語

寿永元年十二月廿日法住寺殿へ御幸なる此御所ハ応保元年四月
十三日御移徙有て後山水木立かくしの御志何ともひみ至るまで思召
様にせさせ給しかて新日吉新熊野其辺迄に祝まゐらせなり

養源院

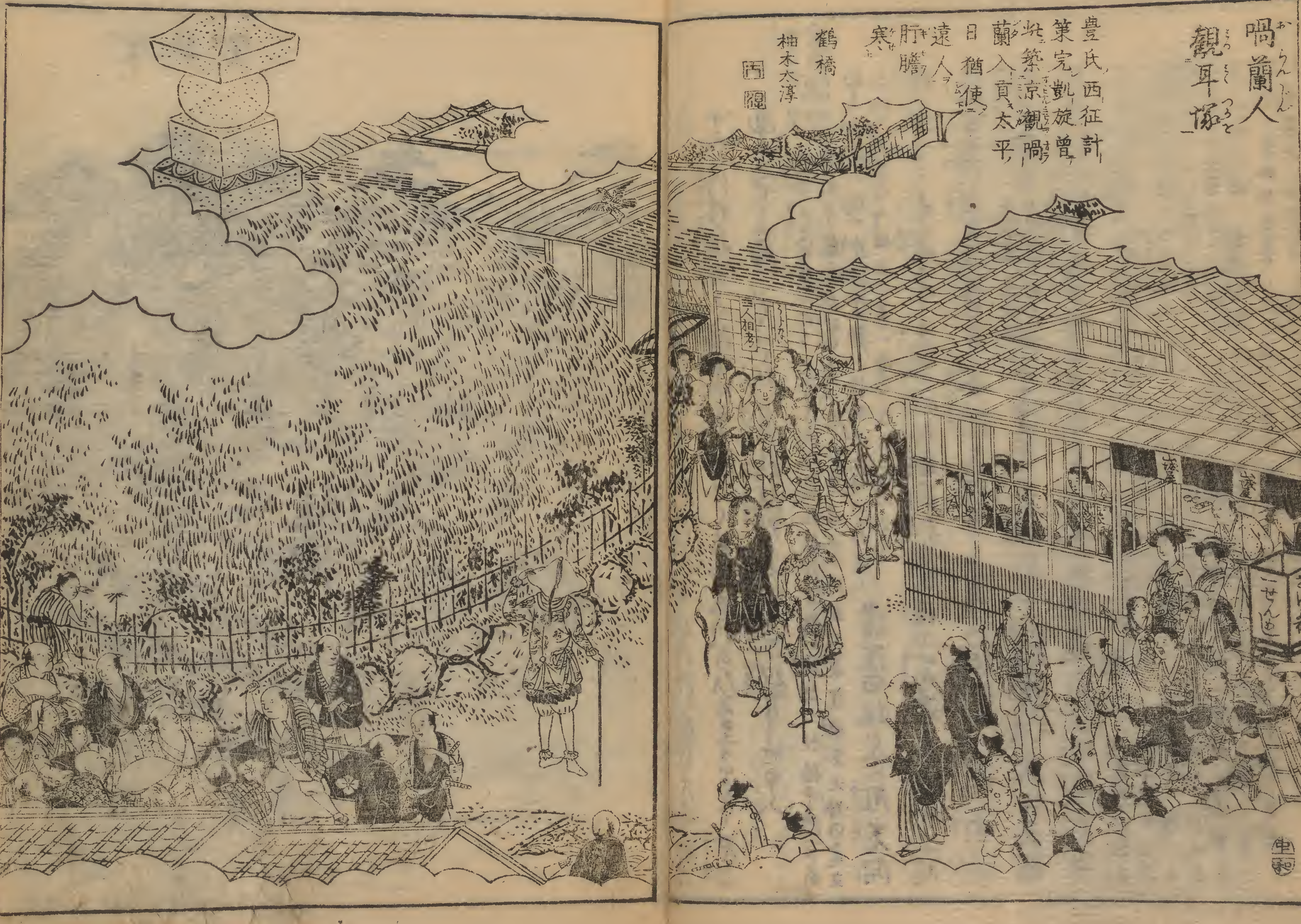
蓮華王院の東にあり天台宗開山成伯法印本願ハ贈従二位権中納言備前守藤原長政の息女豊臣秀吉公の内政大虞院殿英岩大姉の建立也
のち回禄の後ハ崇源院殿一位和興大姉の再建之
これハ英岩の御妹なり事ハ鐘の銘にみえたり

当院の林泉ハ風光間
雅なりて寿岩多し大客殿桜間松間ハ偶に宗達筆桃間上段
の松ニ鶴ハ偶に永徳の筆葵間も同筆と云伝へ或云古右京の南廂
杉戸弐枚　西表象東表獅子　西表獅子東表麒麟　宗達筆東廂杉戸　南表柏ニ鷹　北表猿猴果老　同北西側
杉戸　西表書籍　東西白沢王　瀧本坊昭乗筆之小客殿熊野間猿猴間菊間
上段樹木都て宗達筆袋棚小襖花　百古法眼筆　襖ハ惣じて金極彩色
の客殿書院ハ伏見城の什宝　壺銘書　豊太閤持物　杉戸ハ金地極彩色当院
鐶金とて引移したり　凡鎗。茶壺銘くるま。宇土茶碗。御硯。琵琶。混丁子
。花生。左文字太刀。西湖図。和琴。文台。横物洞天像。繪鑑。書鑑左
秀吉公御所持。豊國神号秀頼公十二歳筆。秀吉公像秀頼公像。常公
御硯。虎画明兆筆。十三仏巨勢金岡筆。菅神自筆法華譬喩品。
到得還来無別事一休筆尚数十品あり略之

喝蘭人観耳塚

豊氏西征計策完
凱旋曾此築涼観
喝蘭入貢太平日
猶使遠人肝膽寒

鶴橋 柚木太淳



智積院

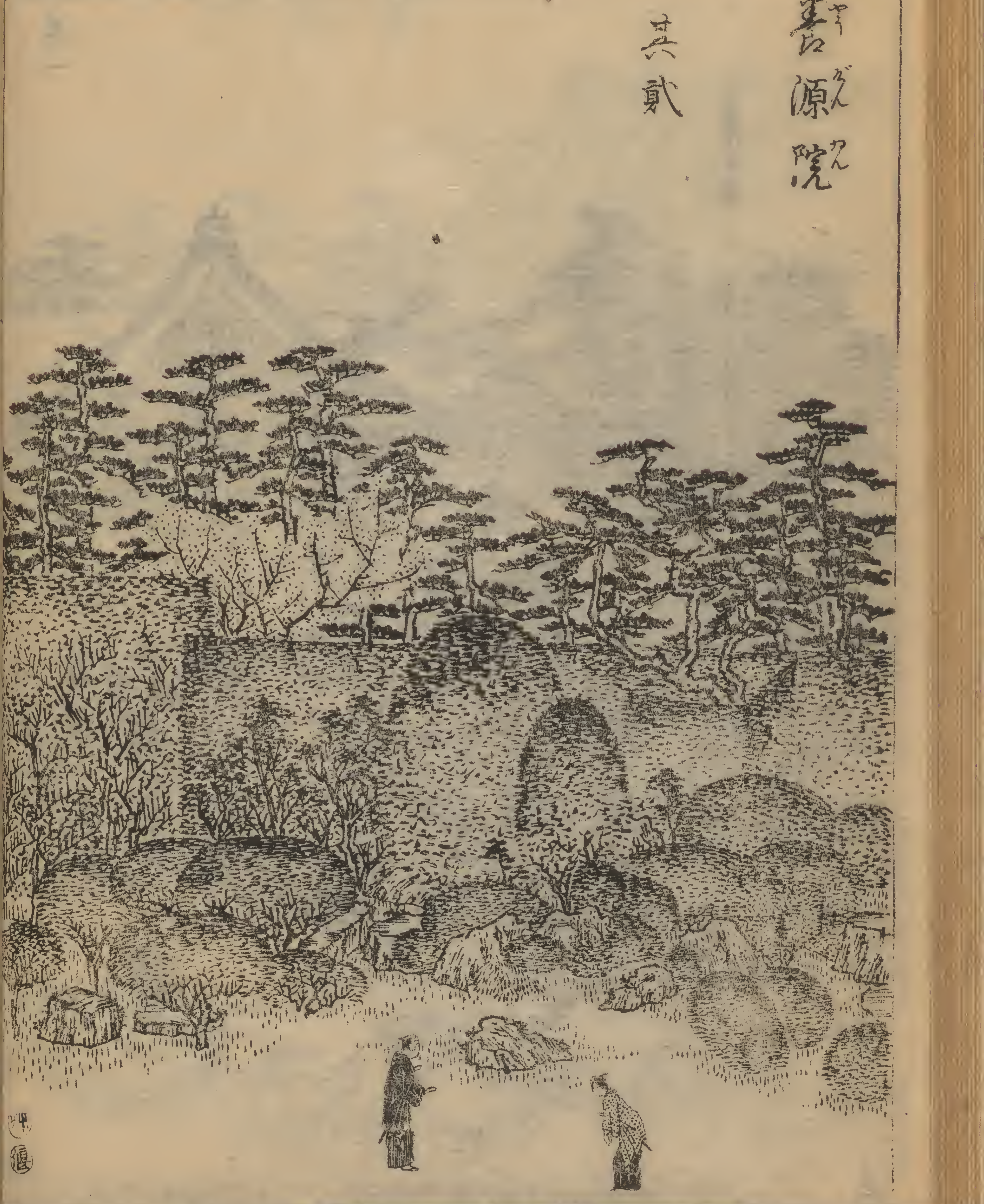
蓮華王院
燕子花

おりてみる
よく似や
画て
かきつばた
里村昌逹

燕子花
薫風吹動綺羅衣
牙佛堂南步不違
欄上衆人何所語
笑言紫燕碧池飛
鶴山畑維龍

書源院
其一
小堀遠州作
千鳥井

書源院 其貳



智積院 書源院の東にあり真言新義派開基玄宥法印此地初めは豊太閤御子棄君菩提の為に創建ありて祥雲禅寺と號す殿后故障ありて妙心寺玉鳳院に移れ東は四塔妙心寺の邦に入る夫より將軍家より覺鑁派新義を附て初瀬に小池坊と創し當院と云へに建済原當院は法住寺殿の古蹟にして滑谷妙法院と限りて南は新熊野尾阪と限る林泉は東に翠巒層々として深林の中に寶閣寂々たり客殿書院倶に百花の圖長谷川等伯筆玄関松に鶴の画も同筆なり想金極彩色之艸木の繪仕屏風一雙も極彩色にしてこれも等伯の筆之生涯の奇筆にして世に比類なし

月輪 今の泉涌寺より南東福寺境内の悲多之いへり九條殿僧頭の地なく関白兼實公の山荘ありて月輪殿と称し其孫光明峯寺道家公禅法を信じ光明峯寺を建て昆沙門天を安置し舊跡を偃月橋の东東宗院の奥之後に聖一國師と號じく東福寺を創して大師とある愛宕山の月輪寺は後世難に作るその月輪禅定兼實公愛宕山に住居しまふ事旧記に見へ又月輪之引と書に稱して當殿僧法師の開基之月輪と地名に呼ぶる今の東福寺の境内のこと之

東福寺四至文 寺數山堺事 弘安三年 限東月輪殿堀路通 限西法性堺 限南溪川 限北東北院田端。 弘安三年は聖一國師遷化の年なり

東福寺中 三聖寺 六原燈爐

原氏池ハ悪七兵衛景清の旧屋なりし此燈籠も其よしありしとかや
此六原 よろしく見たし ながめ よろう 秋鳴る燈籠ともの

慧日山東福禅寺ハ初め九條殿の別荘にして地名を月輪と號す
四條院御宇嘉禎二年月輪禅定兼實公の御孫光明峯寺道家公
禅法に帰入したまひ聖一國師を請じて開山として當山を草創したまふ同四男
鎌倉将軍頼経公頼嗣公両代の時諸伽藍悉成就す塔頭五十餘箇寺
境内の林泉洛南の妙境にして東の山を光明峯と號け通天橋ハ法堂と
常楽菴の間にあり額ハ普明国師の筆橋下の楓葉洛陽の奇観之選佛場
の額ハ無準の筆衆寮と栴檀林といふ額ハ同筆龍吟水并露水ハ山門の東南
にあり洗玉澗ハ通天橋の渓川をいふ偃月橋ハ原虎嘯橋といふ方丈と龍唫
即宗の間にあり（今の橋ハ慶長八年十月 仁叔孝公尼首座再興）千松林ハ通天の東林をいふ法堂の額
潮音堂ハ無準の筆妙雲閣ハ山門の額にして足利将軍義持公の筆也思遠池ハ
山門の前にて蓮池といふ無價軒ハ方丈の書院の外雲橋ハ五大堂の東洗玉澗の末に
架す二老橋ハ五大堂と三聖寺の間にあり五社宮ハ鎮守にして成就宮といふ
十三重石塔ハ藤丞相道家公神詫によりて建る摩訶阿弥の旧跡ハ芬陀利華院

東隣の空地なり墓ハ鎮守の傍にあり当山地主神霊として重塔の際に大石
残まり萬明寺の内に開山塔あり常楽菴と号す額ハ後光明峯寺殿筆
又当山の古跡名所多し塔頭ハ次下に著す

東福寺什寶

大政官牒 壹頂
當山境内四至文 従光明峯寺殿下賜開山聖一
藕絲袈裟
○神明より開山国師へ附属ス
蜀紅錦包物一片
○後水尾院ノ帝御寄附
菊貼錦包物一斤
○櫻町院帝御寄附
唐来宝筐鑰一重
○女院御所御寄附
右神宮亀甲御襪子 開山感得 一斤
開山自讃頂相 一幅
同 乾峯和尚賛 一幅

聖一和尚之四字 光明峯寺殿台翰 兼経公奥書 壹幅
維摩像 顧愷之筆 壹幅
跋陀婆羅像 雪舟筆 壹幅
顔輝筆 十幅
牧溪筆 三幅
門季昭筆 三幅
張即之筆 十一幅
呉道子筆 四幅
顧愷之筆 壹幅

同 佛光国師賛 壹幅
無準和尚筆 十六幅
宋人佛鑑禅師と云 聖一国師ノ師之
殿下道家公台翰 壹幅
開山聖一国師筆蹟 六幅
持明院太上皇宸翰国師號 一幅
月輪殿寄進状 一幅
恵日山圖 雪舟筆 一幅
東洲和尚 宋人 開山法子 貳幅
釋迦像 呉道子筆 壹幅
左右文殊普賢 同筆 貳幅
佛鑑禅師自画讃頂相 壹幅
左右捌々鳥 同筆 貳幅

釋迦文殊普賢 思恭筆 壹幅
竹樓記圖 陳季昭筆 壹幅
岳陽樓圖 同筆 壹幅
酔翁亭記圖 同筆 壹幅
栄天寺額 無準筆 寺ハ廃之 壹幅
方丈額 張即之筆 壹幅
旃檀林ノ額 同筆 壹幅
十六羅漢像 可翁筆 十六幅
五百羅漢像 兆殿司筆 五十幅
鐵拐王蟾 同筆 貳幅
涅槃大像 同筆 壹幅
兆殿司筆 百二十幅
雪舟筆 二十幅

元亨釋書　虎関和尚真蹟　全部三十巻箱入　一軸
張旭草書　一軸
兀菴和尚書　貳幅
陳季昭筆　三幅
方廣鐘銘　貳幅

此外代々帝王の勅書将軍家の御教書和漢高僧の墨蹟名画乃類寳物古器名品の数都て一千餘種あり繁によりて略之且塔頭の院々に霊寳奇物頗多し但にこれを略く

開山護摩具　壹箱
佛鑑禅師印箱　八幡宮神影入　壹箱
黄金舎利塔　壹基
内に佛舎利水晶塔に入外箱四重
瑇瑁茶臺　六十箇三箱
朱塗唐櫃

東福寺塔頭林泉によりて總てこゝに挙る

○三聖寺　北門の内にあり古ハ天台宗釈迦阿難迦葉を仏殿に安す唐仏なり両金剛ハ運慶の作明徳年中足利義満公建立寳覚禅師を開基とす愛染明王八角堂に安す梟燈籠近年三聖寺の林泉に移す古仏の台座に梟の形を彫刻す伝云原は此寺に悉七条京清の館に其附よりありしとぞ

○萬壽寺　今三聖寺に兼帯す初ハ樋口堀川院永長二年の草創平治三年に禅宗に改む五山の一寺寳覚禅師を開山とす樋口富小路にあり天正年中数地召上られて同開山ゆへ三聖寺に移さる

○霊源院　龍泉和尚開基什宝に韋駄天画像仏舎利あり後醍醐帝

○海蔵院　虎関和尚の住坊なり和漢禅刹云虎関和上諱ハ師錬嗣東山寳覚洛陽人貞和二年七月廿四日寂六十九歳

翰林五鳳集　海蔵院偶作　虎関

南北東西不定窠　一盂三事是生涯
近來自笑如蛛子　到晩區々解造家

○正統院　聖一国師の法嗣月船和尚の開基也北殿司もこゝに栖けり稲荷の神感を蒙りて光明寺の絵具谷より移りて得たりといふ

○栗棘庵　白雲和上を開基とす諱ハ恵暁諡ハ仏照禅師永仁五年十二月廿五日当庵にて化す

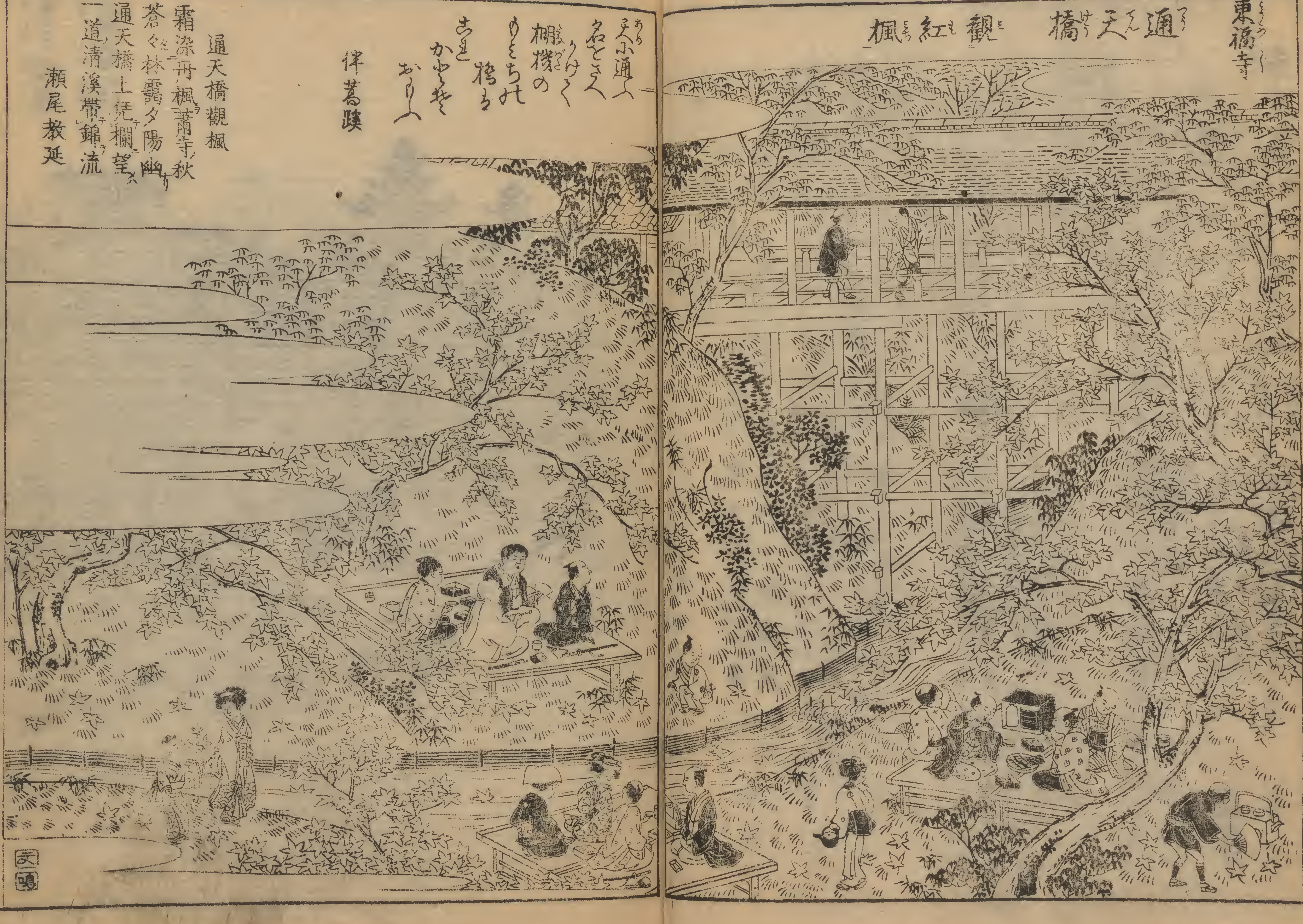
○正徹墓　当庵にあり墓碑に云
清岩徹書記ハ紀氏東福寺の僧なり和哥を好み為尹の弟子と成今川了俊と親く冷泉門下の志友たり庵を松月と号し後山林に籠り招月ともいふ家の集を草根となつけ又歌よみける其徳は世のことなり長禄二年五月九日七十九才にて遂に身まかりし弟子正広建立

○通天橋　額通天　普明国師筆

普明國師行業實録云
寺後溪澗深邃而與開山祖塔阻絶衆病之久矣師親相攸芟榛除荒新開徑直大路而架橋梁于其上扁曰通天作偈賀之
揮却風斤支落霞　虹霓千尺截奔波
通霄一路脚跟下　來往人從鳥道過
普明國師

○即宗院　客殿の奥観之東の山間に茶亭あり採薪亭といふ又其上に自然居士墓あり

Viewing the Maples at
Shielded crossbeam ends



Pine design

恵日塔頭
靈源院

不二菴（ふにあん）遺愛石（いあいせき）

猶帯龍宮
氣自惺佳
人遺愛寘
中庭石其
萬古歸無
朽松是千
年一揆青

東海禪菴

恵日塔頭
即宗院
自然居士墳
自然居士塚
白砂

○霊雲院 不二菴と號す湘雪和尚の住房也 遺愛石 當院庭中にあり相傳ふ此名石初め肥後太守細川光尚侯の持物なりしが
湘雪和尚細川家にちなみて後またに往して其時太守より寺産
五百石を與へんと命じ給ふ湘雪辭して云く出家の後禄の貴は參禪
の邪魔なり願くば庭上の奇石を賜らんと申す寶とせんとて
云ふ因て此銘を遺愛石と號しまた賜ひけり高三尺横六尺岩頭
に小松巻柏を樹る石肌細にしてみどり青く遠く其中にあり無雙の名石なり
名家の詩あり其上に石標をたて須弥諸
名家の記文あり此詩文巻に滿つ
初巻の二三をここに擧ぐ

朝鮮竹堂詩

更不見蓬萊之山在海中靈秀之峯
雖是石而嶙峋苔蝕千年綠峯巒性
奇如前畫道物像之生人間亦是海
外仙儀揚帆而去雲雨中去來此
家於是娛眉上有松花屋帆影
之形六尺百丈開踈綠瓊琚之海中
桃玉令色雪清池日照中峯生紫烟
浮嵐滴翠清漪漣如看此石在蓬萊
蓬萊蓬萊生煙其高軒置
此本不為東洋之貴客此閒臨池畔
不遠為看中有一隆為見生于雲
為君指點去來之朽名不盡遠來意字
自從漢人作誇上人一石之慶常不色
依然翠松根更不見峴山懷淚碑
華久羅漢剝蘚甲申如良無雲岳
雲上雲物鄰侍千百物

癸未孟秋下澣

槎客竹堂題

釋文

君不見蓬萊之山在海中、靈秀之氣鍾異石、水囓苔蝕千年餘、峯巒怪奇如刻畫、造物偷之出人間、天呉海若皆嗟惜、肥州太守好事者、愛此劚於青娥眉、上有孤松蟠欝虬龍之形、下有百赤點綴璘瑤之姿、安排玉盆置清池、日照峯生紫煙、浮嵐滴水清漪漣、始傳此石產蓬萊、還道蓬萊在眼前、高軒置酒車馬來、滿堂賓客皆囬頭、池畔石還為寺中有、向誰為其主相雪曽知故太守、問胡名遺愛、太守恵政人不讓、上人一日三摩挲、石色依舊蒼松根、君不見峴山墮淚碑、載文龜龍剥鱗甲、豈如艮岳靈雲上、雲物衛護千百劫、

癸未孟秋下澣、槎客竹堂題、　齧　齒字改書

寛永二十年朝鮮信使申濡字君澤、竹堂其號也、此篇其自書、草法難讀、令就真跡、鈔臨、併附釋文、按似紫煙之下脫一句、然真跡亦如是、不可考也、姑俟博雅云　松窠杜氏識

有序令不錄　林道春詩

巨掌劈開華岳胸、飛為一朶玉芙蓉、只看湖口九峯異、何用陳朝三品封、恠石旱蘭供佛印、名山曽愧對周顒、按問遺愛須向主公堂下逢　石名遺愛故云

寛永二十年十月中使

羅山夕顔巷叟

林春齋詩

奇石玲瓏淨几間、主人當見小廬嶺、靈雲一朶觸膚寸、泰岳叢根滿恵山、

寛永癸未孟冬日

春齋向陽子

石川丈山詩 并序

湘雪禪翁出遺愛石者、非谷太守細川光尚公之所寄也、奇形怪状、自然而然、惟夫匪造化一尤物耶、可謂戒和尚希代之寳也、慧嶺靈巖、崑墟層城、峙嶒於几邊世間、足以爲幽居士謫散寄章之贍、平泉之戒袖中、東海心裏、蓬萊可併按焉、太古歳韓使申濡、及東都羅山、其国菅齋、品藻斯石、以扇潤色、三子者之撰、各採溟龍珠、殺餘其鱗甲、余又奚言、雖然如言于魏楡化於穀城者、彼之遺祖、我之同姓、鼠亭盃石、古之遺愛也、況禪公翁之需、有所據、豈用固讓爲哉、洒嗽十韻之狂斐、以續貂而已、

一拳太湖石、萬古小仇池、水匯連三島、雲晴秀九疑、巖峯鋒刃競、峭壁画屛奇、鶴怪巣松對、龍思潛岸涯、神功加白玉、鬼斧削青磁、徐出光明洞、似遊五岳岐、僊嶠曽在此、佛日既相移、覔句追蘇軾、留圖戯郭熈、苟除元亮逕、又被遠公麾、遺愛扇僧寳、傳觀奕盡期、

三州泉心光明狂寥石丈山涉筆於凹凸巷之詩僊堂

杜氏做書

あるはの山下にて老人にあひおはすも□さる大かたとかくと細川越中の
太守に売て候ひし久しきものにこそ□□□□
大ぶる身をうつして今爾光尚の伽にてとりの盆石をあつて□

そもそも久しくことなるにかれんみやまにしるを道学をも乗って上に五柱の
松かうる世のみちはらさし人にて呂伯の名をとしつたひ伝へ無かりの猶に
おほりける者大きこと嵩きのめる何かしの家に和歌しく義を尽くしたし
見えけし加へるやうほのか人て見えを久しく人のうちいなさそ寄きこの書
さりとこれるあなほかれける所かうさ口の国のこの歌のことしるとやうとれ
三慮の人をうち告らん為つうねて欲てもてしもあり思ひもありはねさしてさらぬ
あまりにもの德を津さしぬさして我筆さすふ人よもぬうへしけるハとの
細川のあのまへれおしかうらぬ書を来つるもとらやへへん非后の佐山を
韓愈か和し嵩至死の徐生につけるもめしハやうなるに於ひ思川を惜しもあれ
とやかくいふあるにいる方あってぬ人告配ゐとと仰せしやることしもあり

初しられ　始むあしき人の　去月や　称せめ其枯
それうさく　世々て徳の　ちる名に　かち人ゆえに
瑞てもる　それに川こそ　ともあらば　志のかまほうに

名残けん　人そしらん　猶怜やら　よしもあしくとも
黒羽とも　徐かぬあるる　此所とめし　法の何あれし
いてやこの　世にあかるる　み所のきね　かの細川乃
くもれあれば　きりつし後の　形見とも　とりこえとも
あまへらん　情をもうれ　古山ややる　宗の庭とれ
ぬるられに　まてん世かく　きれえんに　加へ世乃
世とらむも　千年の松れ　稀しらる　とふるへ石を
あ備おしめ　羽衣なる世　学えとくれ　ちけの袖とて
おてそうろえやハ

冷泉為景卿

秘書監藤集隠

きれへのあれるかほ此德世の人をうしきなくちらひこそあれ

權中納言基理卿

ここに細川の遺愛あくみゆくその心られ名ある人へくの
亀や満ちし此の世にの卿をとれせけひ世の川のれも

なき人へ手向のために法勝一首をよみて山のなく
せられたりけるに小倉山庄に住てしける時よみ侍るとて

前参議持豊卿

さや古りにし昔の山ふる寺に花の色香はかはらざりけり
友の業なく作らかに法の心の人あるまじきを
たへなりさらに古人の跡しのび肥の山の住持にて
おもひしをとめたまふ心のうちにてうるはしき
ことくらふれ入れとらせよ遺書あるに我が法のつかひ
名をするへしにかしくや月のことのはをきらひてつゐて
あるし給ひきのとのあとをとふらひし時にまた
花もみちしれはかなき秋の月ものさびしき
雨の夜和上もすくて呼ひしにおくるひとこゑ
あるもしの袖や月ものの歌をよみけるまゝに一声と
風をきく不審しくて心も和むる侍しかんらば
さればしらぬをたてるなりつゝは身にしたしき
なしうきことのすみとも庭の面に冴へしのみにそ侍りける

○正覚院 寛政元年のくれに鮮やかに月ものゝあはれのみよしにしるす
庭中の池を松月池といふ客殿は
義昭建仁院伏見よりうつせしものなり

雁月

○荘厳院 林泉風景あり赤岩あり雙鶴石獅子石とて当院の乾
のかたにあり開基は仏光禅師の弟子正續の額あり

○南明院 大政所は豊太閤秀吉公の御妹朝日姫駿河殿にて国初将軍家の御簾中
なり天正十八年庚寅正月十四日聚楽第にて薨去したまふ四十八歳

南明院殿光室宗玉大禅定尼と法諱をしるす開基恵日山百十世
業仲和尚諱明紹永享六年十月十日入寂

○兆殿司墓 南明院南の山中にあり名は明兆と号す業仲和尚の
法兄也永享三年辛亥八月廿日寂す八十一才

○俊成卿墓 同所にあり ○俊成卿女墓 同所にあり浄如尼と号す或云
俊成の母の墓ともいふ謬也

年経て遠へるといへ共古墳多し法諱詳ならず原は法性寺の地也
さるに永明院を創し一代の院主地を給ひ南明院と建つ此墓今
南明院の地のうちの遺跡永明院にあり

其置文云

法性寺俊成の御墓山林の事

合

一 東は上のいはうねをかきりさかひぎらん堂谷へゆきてみちの
東へのふちをかきりてあり
一 南は西東へのたふこいけの上下南の山きしをかきりてあり
一 西は山ぎしのほとりにて南へのかけをかきりてなり
一 北はいかうのかうをさかひみちをかきりてあり
右の山をかの山下地ともに永代みそかに尾し後のため注
しておくところなり
かうあん二年八月八日

浄如判

古文書云

俊成卿墳墓者自月見殿御計之為当寺中封疆陵
灑掃墓壇守護竹木下地彼亡魂菩提可致也恐々謹言

八月廿七日

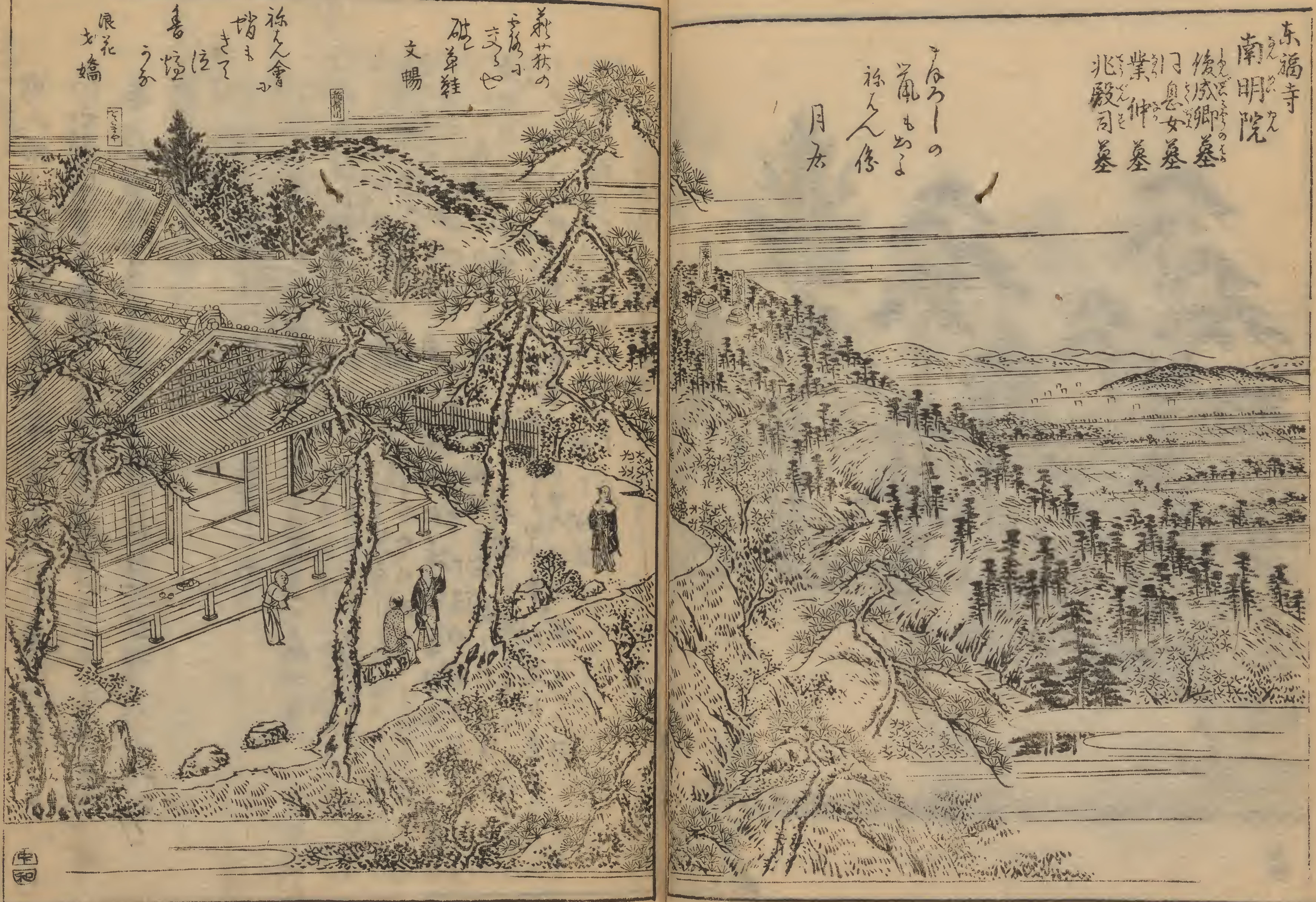
永明院侍衣中

祖禅判

祖禅は東福住持芬陀利花定山和尚也

東福塔頭
荘厳院（しやうごんゐん）
獅子巌
紺眼星懸威百獣
赤毫焔起照群生

恵日塔頭
南昌院


東福寺
南明院
後成卿墓
同息女墓
業仲墓
兆殿司墓
月居
文暢
稲荷山

東野州聞書云
或人語りしは後成恩寺の墓東福寺の永明院の奥なる山にありとや申せし之
此永明院の主なる僧おそろしき事有間毎月廿九日今も参りまゐると也
毎朝大悲咒一反宛回向には五條三位俊成卿など入らるゝとかや
彼院の僧申之

嵯峨記 藤原植通云
東福寺南明院は後成恩寺の建立とぞ侍る

宮玉集 於永明院後成恩寺墓二
敷島の道にはおやの親の跡とちふとは志るや霧の古寺　実隆

清原深養父旧蹟 大和大路三之橋より南二町許東側三条何某といふ民家の奥之相伝ふ此屋敷古北向深養父の故宅也
跡ありしく竹林の中に古井あり是れ深養父元輔清少納言などの世々の墳墓なりといひ又東乃奥に
古墳あり是れ深養父元輔清少納言など世々の墳墓なりといへど詳ならず
南の隣家に小堂あり観音を安置す深養父の念持仏なりとぞ此の
主三条氏に問ひしに慶長年中に自らの家系ありて随に豊臣
清原の後裔とありて家に鑑と長刀を家蔵とす
秀次公より和歌をとりて其には贈られしと云伝へ家に
以て此の地名は月輪といひ此由縁旧記にみえさりたれど三条
に記して此所の字は穂積町といひ此町を古は深養父
家の名残にて此の町より北なる町の名を穂積
勝郡の旧記とくあれども又詳ならず
後撰集云 縫信の難波の後拾遺云元輔が親の許りしは徒宣が桂の家に会ひして又
の日元輔が月輪といふ所に同人と遊びしに加へり輔親が後
云侍りしと徒宣は元輔の孫にて侍りしと云侍りしとある比に元輔申侍りし
かはりに加へけむとあり遠く読侍る云

家集 加はるあり所にありしかんとれぞ人に問ひ侍りしそこには侍りて月の輪といふ所にまかり帰りて
月の輪にあるべき所よも志らぬして桂の里や君を待らん　元輔

清原深養父家系
○天武天皇─舎人親王─貞代王─有雄─通雄─海雄 賜清原姓 筑前守
房則 豊前守─深養父 内匠頭 蔵人所雑色─顕忠 下野守─元輔 肥後守─清少納言

舎人親王陵 稲荷社説云稲荷大る居と楼門の向北側之辺年月を建て藤尾
に遷座の時藤杜社と号に原藤杜社此地にあり稲荷社山上三の峯より山下
の霊地に垂跡とあり藤尾は今の地に移しける藤杜の社伝云山城国紀伊郡藤尾
の社今の稲荷の社地なるべし
墨染里は深草の郷中也今は伏見の墨染といふむかし昭宣公薨じ
給へる時上野岑雄が詠じたる歌より墨染にさけと思ひし桜も今
は深草の山辺の地名となりて芝居うられめの家所々に見えて
むかしの面影もなく侍るに

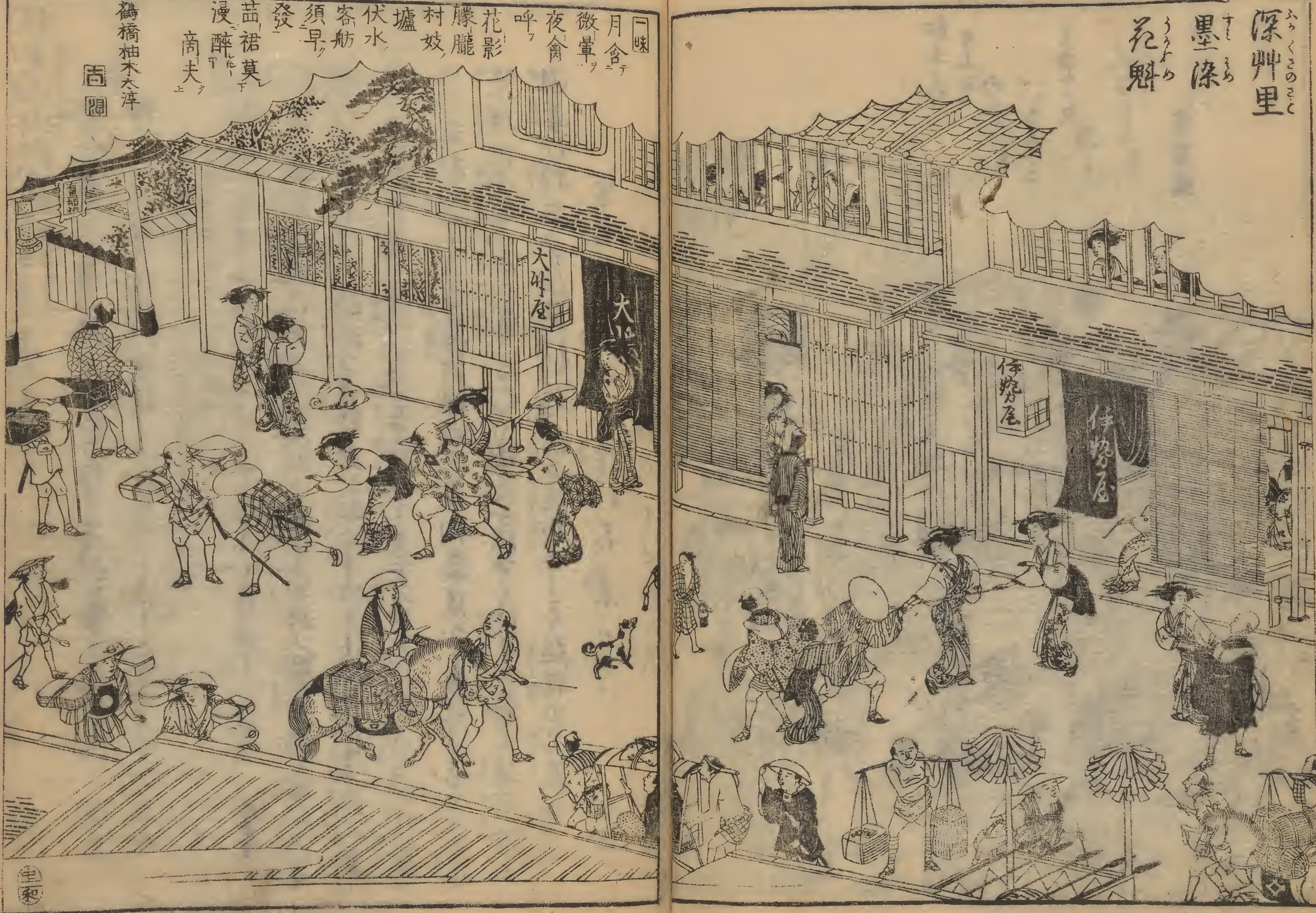
稲荷社初午詣
初午の
そよにあひてまし
いなり山
またなれ杉も
人にとゝろく
伴蒿蹊
下馬

深艸里墨染花魁

一味

月含微暈夜禽呼
花影朦朧村妓壚
伏水客舫須早發
茜裙莫漫醉商夫

鶴橋柚木太淳



伏見山 今の城山なるべし 一名松原山 拾遺愚草 山城に古松多し

王吟
伏見山妻こふ鹿の涙をやかりほの庵の萩のうへの露　定家

帰しさの山秋の田面は色はくへ松のみとりを旅になりけり　家隆

八月十五日ふしみにみゆきありし人々に令
よ為さ歌よませ給ひけるに

御集
新そく松原山の秋風にゆふされきよく月出にけり　伏見院

伏水の霸跡は文禄三年豊太閤初て城を営給ふ監官は佐久間河内守瀧川豊前守佐藤駿河守水野亀之助石尾与兵衛也慶長五年七月晦日石田三成が叛逆にて金吾秀秋宇喜多秀家此城を攻る江州永原の兵華歓に通じて落城に城将鳥居内藤戦死して其名今に永世に輝く今は荒廃田園となりて桃花多く弥生の盛りには遠近の人こゝに遊宴し特に宇治見ともいふ月見の岡風色幽にして絶景の名区也

宇治白く桃さく陰れ花菜の郷　信徳

大名の字成桃乃さかりけり　正秀

月見せんふしみの城の捨廓　去来

水寒し生駒にはゞく墨の水　移竹

山河存旧色　林樹競芳菲　荒苑弾丸尽　空看春鳥飛　梅華仙

多少田夫屋　相連古塁間　幼児纔五歳　能説破三韓　仝

高台見陳跡　倚杖日黄昏　空谷多年恨　桃花終不言　仝

梅渓は城山の北にして五帝太閤福寿庵大亀谷八科嶺まで初春の清香四方に薫じ古墓霜葩艶しくして痩枝に花婉々たりさま人賞しらく洛下の騒人ふかきの陰に解きの趣しれと忘る羅浮の夢の遊び題詠万斛の句儲て天下の春に魁をとる東坡の辞あり

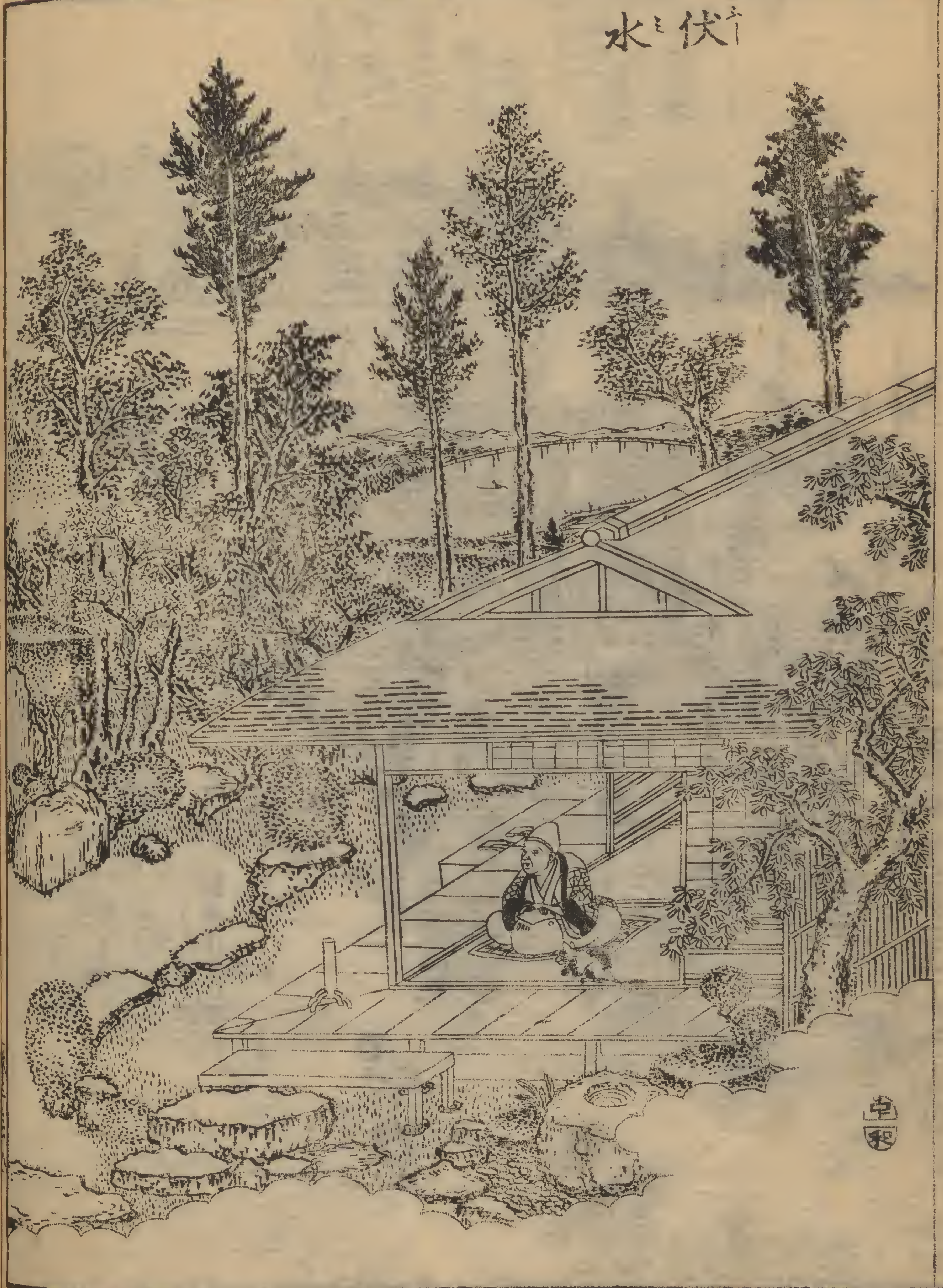
風香雪白大亀渓　千樹梅花東復西　若使林逋知此地　孤山春静鎖幽栖　龍公美

荒丘断壟旧金湯　路入梅花春渺茫　斉是羅浮林下夢　笑抛一盞酔猿郎　六如庵

梅遠近南すべく北すべく　蕪村

伏見梅渓

伏水



龍徳庵

小堀遠州作

伏水

慶雲庵

芝菴和尚の
開基なり
門の額ハ仏和尚
の筆なり

兎道舟中

緑水青山一色秋
濯纓詞客棹孤舟
興來欲詠滄浪曲
又恐蘆洲驚白鷗

艸廬

梅の香やまた月夜の面白く　かゞ　千代

仇を恩もて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るや梅の花　仝

衣裡の内ら衣裡からにむめの花　浪花　大江丸

眼のさめる伏水のむめれさうらうか　同　二柳

梅か香や山も葛屋も動くこの世　平安　嘯山

むめのをれあの月かゝるをりをやか　惟然

垂らしみし松のおともむたや梅の身　定雅

都林泉名勝圖會巻之二　終